

### (13) 納沙布岬および北方館

#### ①施設の概要

北海道根室半島の突端に位置する納沙布岬からは、北方領土の一部、歯舞群島を一望することができる。一番近い貝殻島までの距離は3.7km。

北方館の開館・公開日時は、3月16日～11月15日／9:00～17:00、11月16日～翌3月15日／9:00～16:30。休館日は月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、5～10月の月曜日は臨時開館あり）、年末年始（12月31日～翌1月5日）。



#### ②モニターツアー実施で得られた課題

北方館の資料や施設の充実を求める意見が多い。北方四島交流センターとの役割分担を含め検討する必要がある。

#### ③誘致に向けた改善点

- ・施設全体（展示物）を含めた刷新
- ・北方四島交流センターとの役割分担

### (14) 開陽台展望台

#### ①施設の概要

標高270mの「開陽台」にあり、視界330°、地球がまるく見える。広大な自然、区画された牧草地・防風林、点在する牧場風景、知床連山、遠くには国後島や野付半島、根室半島を一望することが可能。



## ②モニターツアー実施で得られた課題

中標津空港から近いこともあり、到着後または出発前の時間調整としての利用を想定した意見が多い。眺望については評判が良く、写真撮影スポットとしての利用が想定できる。

## ③誘致に向けた改善点

- ・トイレの拡充
- ・説明パネル等の充実

## 5-4 今後の修学旅行等の誘致に向けた方向性

5-3 では今回調査で訪問した個別の施設に対し、課題と誘致に向けた改善点を提示した。5-3 を受け、その他施設にもあてはまる、誘致に向けた留意点や改善点およびその他の留意点等について整理した。

### 5-4-1 インフラの整備

全体を通じて、当該地域の収容人数は小規模なものが多い。修学旅行の規模で例えると1度に1クラス程度の収容人数である施設が多数を占めている。早期の対応は困難であると思料するが、収容人数の拡充は根本的な課題である。

また、現在の施設規模であっても、修学旅行を想定するとトイレの数が少ないと旅行代理店や学校教師が考える施設も多い。さらには、ホテルも含め、バリアフリー対応がされていない施設も多いことから、昨今の基本的な旅行ニーズに応えるためには、こうしたインフラの整備を実施していくことが必要になるといえる。

### 5-4-2 大規模校向けの具体的行程の作成

200名～300名の大規模校を誘致するためには、具体的な行程を作成する必要がある。例えば、羅臼町では、町の中心部に漁港、昆布倉庫、ビジターセンター、国後展望塔が隣接している。各30分程度の滞在時間、各施設40名程度の受入れとすると、これら施設をローテーションすることにより200名の受入れが可能となる。

現状では収容人数が全体的に少ないことから、上述したように移動時間も含め、ローテーションを組み、修学旅行のメニューとして提示・提案していくことが重要である。

### 5-4-3 対象別のメニューの整理

アンケート結果にあったように、同じ体験メニューであっても道内と道外からの参加者の反応は異なるものもあった。特に顕著であったのは、道内で体験の機会が多いもの（バター作りなど）は道内の参加者からの評価は相対的に高くない。このように、体験メニュ

一や訪問先について、共通／道内向け／道外向けでメニューを検討する必要がある。

また、学校への直接訪問の中で、学習を中心にした修学旅行の他、3割程度はレジャーの要素が強い修学旅行を実施している学校もある。このため、メニューの作成においては、学習中心であっても、レジャー中心であっても対応可能となるようにメニューを準備する必要がある。

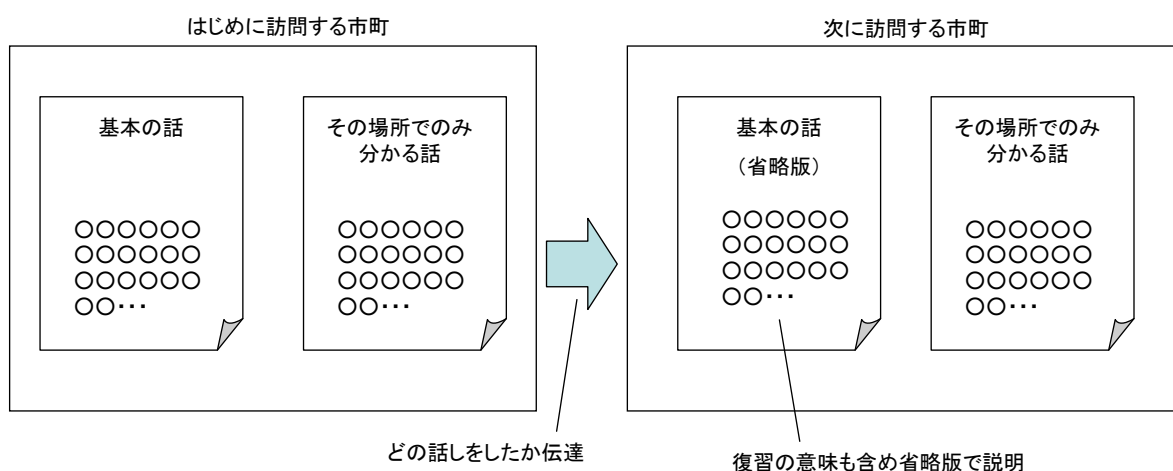
#### 5-4-4 説明方法・内容の統一・共有化

分かりやすい説明および丁寧な説明は、最も求められている要素の1つである。これまで、当該地域では修学旅行の受入れ数が少ないこともあるが、以下の視点・区分で話し方、話す長さ、使う言葉を整理することが必要である。

話し方・使う言葉の分類：小学生、中学生、高校生、大学生、一般

さらに、北方領土についての話しを例にとると、複数の市町で話しを聞く場合に、内容が重複することが想定される。重複しても問題ない『最低限伝える内容（歴史、現実）』とその場でしか説明できない『場所に依存する内容』を明確に分け、他市町とも共有しておくことが重要であると考える。

例えば、修学旅行で複数の市町を訪れる場合、はじめに訪れた市町では『基本的な北方領土についての話（詳細版といってもよい）』と『その場でのみ理解できる話』をする。その後、次に訪問する市町に対し、『基本の話』をした旨を伝える。次の市町では、復習の意味もこめ『基本の話（省略版）』と『その場でのみ理解できる話』をする。このようにすれば、同じ内容を重複して聞く（その結果、聞かない）ということが発生せず、充実した説明が可能になると考える。



## 5-4-5 ガイドの育成

### (1) 北方領土問題についての語り部の育成

語り部の育成は急がれるべき課題である。現在のように高齢である元島民 1 世に全てを任せるという方法では限界があると考えられる。また、話を聞く人のニーズとしては、島での生活、ロシア侵入時、島を離れてからの生活、島への思いなどであり、これらが時系列に整理されて話されないと、はじめて聞く人にとっては理解しにくいものである。

このことから、今後の語り部の育成について以下の検討事項を提案する。

- ・全体のストーリーの整理・共有化
- ・元島民 1 世の位置づけの変更（全てを話す役割から、その時の気持ち・思いを語る役割に変更する）
- ・元島民 2 世・3 世の活用（時系列で何が起こったかを話す司会者の役割を元島民 2 世・3 世に課す）
- ・写真・映像の活用（上記の話しとともにスクリーンに当時の写真・地図・動画を流し、視覚からの理解も深める）

### (2) 施設のガイドの育成

様々な施設を修学旅行生が訪れた時に、その施設が良かったか否かを感じる大きな要素として説明するガイドの質が大きく関連してくる。同じ展示物を見ても、単純に事実を説明するのか、訪問者の生活や嗜好を感じ取り、分かりやすく説明するかで、感じ方は変化するからである。現在、当該地域においては、ガイドの育成講座が始まっていることから、各市町のガイドに対応する者は、こうした機会を活用し、質の向上に努める必要がある。

### (3) 総合ガイドの創設・育成

北方領土隣接地域の修学旅行の移動手段はバスとなり、施設間等の移動時間は他地域と比較し長時間となるため、この時間を有効に利用することが重要になる。現在は、地域の説明や次の施設の説明等は、添乗するバスガイドが多くを担っているが、地域の歴史、産業、観光、北方領土問題について総合的に説明できる付き添い型の総合ガイドを創設・育成することも考えられる。

## 5-4-6 悪天候への対応

当該地域へのツアーでは、現地で北方領土を見ることが最大の目的であり、最も啓発効果を発揮するイベントとなる。この意味において、悪天候で見えない場合にいかに対策を立てるかが重要となる。こうした悪天候時には、例えば、セカイカメラ<sup>1</sup>のような拡張現実（AR）技術を用いて、晴天の島の景色が端末を通して綺麗に見えるようなしくみを構築す

---

<sup>1</sup> 位置座標情報をアドレス代わりに使い、データをインターネット上にある専用のサーバーからダウンロードして i-Phone 上で閲覧できる

ることが考えられる。当面の対応としては、例えば A3 程度のパネルや写真をガイドに持たせるなどして、現地で説明を行い、悪天候対策を行うことが重要である。

#### 5-4-7 総合的窓口の明確化

今回のモニターツアーを通じて、各市町の修学旅行に対する熱意等は十分に伝わったとのコメントを参加者の多くから得ている。ただし、北方領土隣接地域の自治体の一体感が感じられないとの意見もある。その 1 つとして問い合わせの際の窓口の問題がある。特に北方領土学習については、北方領土隣接地域でしか実現できないコンテンツであることから、この北方領土学習およびそれに付随してくる修学旅行のメニュー・行程作りの支援やアドバイスが可能な総合的窓口を明確化する必要がある。北隣協（北方領土隣接地域振興対策根室管内市町連絡協議会）がその位置づけにあるが、観光面なども含め、より一層の地域的視点からの窓口としての役割が求められるようになると思う。

#### 5-4-8 総合案内（パンフレット）の作成

5-4-7 の課題と同様に、現在、北方領土隣接地域を総合的に取りまとめているツールは根室市が中心となり作成した「北方領土学習のご案内（修学旅行の手引き）」および北海道根室振興局が作成した「北海道根室地域の修学旅行」となっている。モニターツアーの参加者および委員会での議論では、1 市 4 町個別のパンフレットは充実しているものの、地域としてまとまった総合案内の必要性が指摘された。総合案内のコンテンツとしては以下のものが想定される。

- ・ 地域の施設の概要
- ・ みどころ
- ・ 推奨ルート

#### 5-4-9 短時間でプレゼンテーション可能なツール作成

紙媒体のプレゼンテーションツールでは、北方領土隣接地域の魅力を伝えきれない場合が多い。画像と音声を活用した動画によるプレゼンツールが、短時間で直感的に理解を深められるツールとして最適であると思う。例えば、北方領土隣接地域への旅行ツアー客（年間約 200 万人来訪）を対象に、北方領土隣接地域の観光資源を紹介する DVD を作成し、観光旅行ツアー客が利用する空港や観光バスの中などで、北方領土隣接地域を紹介する方法も有効な手段として考えられる。

#### 5-4-10 1 市 4 町以外も取り込んだ案内

修学旅行の実態調査を見ると、北方領土隣接地域を来訪する場合は、釧路空港や女満別空港の利用もある。修学旅行は必ずしも北方領土隣接地域で閉じている訳ではなく、現実的にはむしろ周辺自治体も含めてツアーが組まれている。例えば、総合案内の作成におい

では、現実も踏まえ、根室市に隣接する浜中町も含んだ案内とし、現実的に利活用できる案内とすることが望ましい。

#### 5-5 将来的な取組み案

5-4 で整理した本件調査およびモニターツアー実施などから整理した今後の展開案の他に、昨今の ITC（情報通信技術）の発達や将来の普及状況を鑑みると、以下のような展開も考えられる。

##### 5-5-1 情報端末の活用

修学旅行のネックとなっているバスによる長時間の移動を逆手にとって、楽しく学べる北方領土現地学習の時間と位置づけ、スマートフォンや i PAD 等の情報端末を使った独自のプログラムを作成する。

<展開・活用イメージ>

- ・ 北方領土隣接地域に滞在中、生徒に情報端末を無料で貸与。情報端末に対応した「北方領土学習アプリ」を制作し、無料配布の上、車内で学習。さらには、関係団体のサイトに点在する元島民の講話や当時の島の暮らし、現在の様子などのライブラリー等にアクセスし、能動的に学習出来るような環境や仕組みを整備。
- ・ 北方領土隣接地域の概要、体験を予定しているメニューについて事前学習が可能。バスには講師役のガイドが乗り込み、北方領土学習に対応する。
- ・ 訪問した先々で写真を撮り、感想などを書き込み、それらのデータで電子新聞やブログを作成、発表するなど事後学習として活用する。

##### 5-5-2 一般観光客向けのツアーの開発

修学旅行以外の学習支援として、一般観光客向けのツアーや学習型観光（学ぶ観光・旅育）の開発を提案する。戦争体験者である高齢者向けに北方領土学習をテーマとした旅行を提案することも想定できる。

こうした『旅行を通じて学ぶ』という観点からの北方領土学習を提示すれば、旅行会社の売り込む対象も広がるものと考え。釧路や周辺自治体を含めた一般観光客向けの着地型ツアーとして、学びの要素と絡めて提示することも有効であると考え。